

『シャーロット・ブロンテの生涯』研究 (16)

アリス・ロー

芦澤久江

1、はじめに

これまでブランウェル (Patrick Branwell Brontë, 1817-48) の擁護論を展開した主な人物はフランシス・グランディ (Francis Grundy)、フランシス・レイランド (Francis Leyland) である。グランディもレイランドもブランウェルと交流があり、特にレイランドはギaskell (Elizabeth Cleghorn Gaskell, 1810-65) が描いてないブランウェルの才能を明らかにした。こうした擁護論者たちが敵対視しているのは、ギaskellやメアリ・ロビンソン (Mary Robinson) である。彼女たちはブランウェルをブロンテ家の頭痛の種だったとし、ブロンテ姉妹はブランウェルの犠牲になったという論調を広めた。ブランウェルに関するこの論争は幾分収まりを見せたように思われるが、アリス・ロー (Alice Law) は再びブランウェルの擁護論を展開している。そこでアリス・ローの主張とはいかなるものであったか、これまでの擁護論と違いがあるのかどうかを考察してみたい。

2、ブランウェルの少年時代

アリス・ローは、さまざまな伝記作家がこぞってブランウェルを墮落した人間だと書いていると述べている。

Mrs. Gaskell passes him by with shudder, referring to him as one who proved the bane of his sisters' lives ; Sir Wemyss Reid, in his monograph upon Charlotte, refers to him as "this lost and degraded man" ; Miss Mary Robinson (Madame Duclaux) , in her study of Emily, cannot find words sufficiently scathing to convey her contempt for Branwell ; and Mr. Swinburne, in his review of Miss Robinson's work, adds his invective to hers. (13-14)

上述の引用にあるように、批評家たちはブランウェルを悪者にしてきた。ギaskellはブランウェルが姉妹の悲劇的な生涯の原因だったとし、リード (Wemyss Reid, 1842-1905) はブランウェルを「破滅し墮落した男」だとレッテルを貼った。またロビンソンの作品ではブランウェルを嘲る直接的な言葉は見つからないが、スウィンバーン (Algernon C. Swinburn, 1837-1909) はロビン

ソンの著書を批評する際、ロビンソンよりもさらに激しい非難の言葉をブランウェルに浴びせている。ショーター (Clement K. Shorter, 1857-1926) はブランウェルの天才を簡単に片づけてしまい、シンクレア (May Sinclair, 1879-1946) はブランウェルに触れ、雑多な問題を取り上げ、詰め込んでおきながら、何の主張もなく片付けてしまっている、とローは主張している (14)。

ギaskellの伝記以来、ブロンテ姉妹の成功を強調するあまり、ブランウェルの失敗が大きく取沙汰されるという図式が作られてしまっている。ただそれがかえって、読者には不自然に思え、伝記作家のヒステリックな反応はブランウェルに何らかの恨みを抱いているのではないかと思わせるほどである (Law16-17)。ローはブランウェルを激しく非難する批評家に対抗し、ブランウェルの擁護論者であるフランシス・グランディの説を踏襲している。

ローはグランディに依拠しながら、ブランウェルの少年時代について書いているが、ブランウェルの生まれた家がソートンではなくハワースだとしている点は致命的な間違いである。ローの時代には数多くの伝記が出版されていたし、最初に伝記を書いたギaskellでさえ、ブランウェルが生まれた場所はハワースではなく、ソートンであると明記している。これはローの明らかな初歩的誤りであり、彼女の伝記作家としての知識に疑いを持たざるを得ない。

またローは父親パトリック (Patrick Brontë, 1777-1861) について次のように書いている。

But his whole system of training proves beyond the possibility of doubt, that he was no lover of children. His ideas were rigid, the little ones were not to come into close contact with him, he was “saved” from them not to be disturbed by noise or play. (20)

ローがパトリックについてこのように書くということはブランウェルを擁護するつもりがあったとしても、パトリックにはあまり関心がなかったからであろう。この記述はパトリックが子どもたちに何の愛情も示さない、厳格な父親だったという強い印象を与えている。

確かにパトリックは普通の父親とは大きく異なっていたかもしれないが、子どもたちの教育、特にブランウェルの教育には非常に熱心だった。したがって、パトリックについて、ギaskellの伝記だけでなく、その他の伝記作家の作品を研究すれば、さらに深い考察ができたはずである。伝記作家において、緻密さに欠けているということは決定的な欠点であり、説得力をもたないことを露呈しているのである。

さらにローは、パトリックが家族に肉食をさせなかったという点を持ち出し、ブランウェルの成長と食事の関係について、次のように主張を展開している。

In the case of Branwell, the lack of nitrogenous food was especially disastrous, as a boy needs more bone and muscle building, and there can be little doubt that Spartan diet upon which he was reared induced the fragility so eminently noticeable in his constitution, both as boy and man. It was probably this lack of stamina and natural

vigour which led him in later years to resort to stimulants that might spur his flagging energies, and which rendered him unequal to the strain of combating the series of disappointments he eventually encountered, under which his spirit broke completely and finally. (21-22)

パトリックが肉食を嫌ったと証言したのは、解雇されたバーンリー出身の召使であった。ギaskellはその召使の言葉を信用して、伝記のなかで事実であるかのように書いたが、その証言が不確かなものであることは明らかとなっている。なぜならその召使は仕事中心にお酒を飲み、解雇されたため、パトリックに恨みを抱き、事実でもない話をしたと考えられているからである。それゆえギaskellの記述を検証もせず、安易に持ち出してくる点においても、ローには伝記作家として慎重さが足りないと言わざるを得ない。

仮にパトリックが家族に肉食を禁じていたという話が事実であったとしても、当時は、子どもの成長期に食事がいかに大事なものであるか認識されておらず、グラマー・スクールで寮生活をしている裕福な子どもたちでさえ、食事への配慮がされず、つねに空腹を強いられていたと言われている。ローが述べているように成長期の児童の栄養問題は重要なことではあるが、パトリックのスパルタ方式の食事のせいでブランウェルの肉体と精神のバランスが保てなくなったと考えるのは、あまりにも事実を歪曲した話ではないであろうか。ブランウェルの精神にある程度食事が影響を与えたとしても、それがすべての不幸につながったと考えるのは論理に大きな飛躍がある。ローはブランウェルが悪のイメージに固定されてしまうことに反対しながら、父親のパトリックについてはギaskellを踏襲し、まったく真偽を確かめていない。それどころかブランウェルの非行はパトリックの食事の与え方に問題があるとして、責任転嫁をしているばかりか、問題を履き違えているように思われる。その点ではロー自身も、ブランウェルを悪者にしてブロンテ姉妹の悲劇的な人生を強調する伝記作家と同じ手法をとっているのである。

ローが、ブランウェルの子ども時代について指摘した重要な点はブランウェルが創作をリードしていたということである。ギaskellは、初期の作品はすべてシャーロット(Charlotte Brontë, 1816-55)が書いたとしているが、ローはブランウェルが物語をリードしていたと指摘している(23)。わたしがローのこの意見を重視するのは、人々はブロンテ姉妹に注目するあまり、ブランウェルの才能を正しく評価してこなかったからである。ギaskellがそうであったように、初期作品はすべてシャーロットが作った物語だとした方が、ブロンテ姉妹の伝記には都合がいいのである。すなわちブロンテ姉妹、特にシャーロットは子ども時代から優れた作品を残し、それがやがては偉大な作品『ジェイン・エア』(*Jane Eyre*, 1847)に繋がっていったと考える方が自然であり、人々には理解しやすい筋立てであるからである。

ブランウェルはウィリアム・クーパー(William Cooper, 1731-1800)の「難船者」(‘The Castaway’)を愛唱し、繊細でありながらもボクシングが好きであったことはレイランドなどの証言により知られている。またブランウェルは村のボクシング・クラブのメンバーであり、ここで

好ましくない人たちと出会うことになったとローは述べている (28)。しかし彼は音楽、絵画にも精通し、類まれな才能に溢れていた (Law 31)。ただ彼の人生に暗い影を落としているのはマリア (Maria Brontë, 1814-25) とエリザベス (Elizabeth Brontë, 1815-25) の死であり、その結果彼の詩は憂鬱な雰囲気醸し出している (Law 31)。ローのこの見方はまさに的を射ている。ブランウェルを研究するとき、マリアの死が彼の人生に計り知れないほど大きな心の傷を残していることに気づかない者はいないであろう。酒と博打に明け暮れた放蕩息子ではあるかもしれないが、彼は繊細であるからこそ、姉の死を心の奥底に受け留め、この世の不条理に絶望していたのであろう。それゆえブランウェルの生涯で着目すべき部分は彼の非行よりもむしろ、ローが着目したように、姉を失って突き当たった人生の不条理という事実なのである。

3、ロイヤル・アカデミー入学志望からブランウェルの死まで

ブランウェルがロイヤル・アカデミーに入学したのかどうかについては、さまざまな説があるが、ローはギaskell、レイランド、ショーターの説を引用しただけで (36-39)、独自の見解を示しているわけではない。またブラッドフォードでブランウェルがアトリエを開き、なぜそれを閉じてハワースに戻って来たのか、その理由もこれまで論争的となってきた。ローが「ブラッドフォード時代」 (43) と呼んでいるこの時期は、ブランウェルの生涯においても収穫の多い時期で、レイランドによれば、ハワースに戻ったのはブラッドフォードで借金をしたからではないと主張している (178)。この問題でもまたローはレイランドの主張を繰り返すばかりで、特に目新しい発見をしているわけではない。

ローはブランウェルが関心を持っていたのは、絵画ではなく文学、特に詩であったことに着目している。ブランウェルはこの時期には詩を量産していて、その意味では充実した時期であった (Law 43)。しかしブラッドフォード時代の友人によれば、ブランウェルは明らかに自信を失っており、それは肺結核の兆候があったからだとしてローは説明しているが (43)、この友人が誰なのかは言及されていない。ブランウェルはそれでも自分が何に向いているか悩み、もがいていたという (Law 43)。ローが述べているように、ブラッドフォード時代のブランウェルは画家になるのか詩人になるのか大きな岐路に立たされていたと言える。父親のパトリックはブランウェルを牧師にすることはまったく考えていなかったようだ。どのような理由によってかはわからないが、ロイヤル・アカデミーにブランウェルを行かせようと計画したり、ブラッドフォードにアトリエを持たせたことから、パトリックはブランウェルに画家の道を歩んでほしかったようである。ところがブランウェル自身はアトリエを開きながらも、もう一つの道、詩人の道を模索していた。だからこそ、ブラッドフォード時代、ブランウェルはワーズワース (William Wordsworth, 1770-1850) に詩を書き送ってコメントを求めたりしているのである。

この後、1840年ブランウェルは湖水地方のポスルスウェイト家の家庭教師となるが、ここでハワースの寺男のジョン・ブラウン (John Brown) に宛てて書いた手紙がブランウェルの評判を一層汚

すこととなる。この手紙の公表はブランウェルを擁護する側からすると許しがたいものになっている。それがブランウェルの品性を疑わせるような下品な手紙だからである。宛名がジョン・ブラウンだったことを考えると、そういうこともあり得ると思うが、ブランウェルは後に出版されるとは思わずに、ジョン・ブラウンを喜ばせようとして大げさに書いた。つまり極めて個人的な手紙だったにもかかわらず、ブランウェルがいかに下劣であったかを示す証拠としてその手紙が公表されてしまったことにブランウェル擁護者は憤りを覚えている。またこの問題が収束しはじめたにもかかわらず、再び蒸し返したのはメアリ・ロビンソンであった (119-24)。メアリ・ロビンソンはブランウェルを擁護する人々の反対の立場に立ち、エミリの賞賛に努めたのである。

ブランウェルを徹底的に悪者として描こうとしていたギaskellでさえ認めざるを得なかったのは、ブランウェルの散文の才能だったとローは指摘している (51)。もしブランウェルがケンブリッジの一年コースに入っていれば、村の悪い仲間に影響されることもなく、彼の生涯も変わっていたかもしれないと推測している (Law 52-53)。しかしブロンテ家には財産がなく、おまけに母親の看病のための借財があったり、頼れるのは伯母のみであった。その伯母の財産もシャーロットとエミリ (Emily Brontë, 1818-48) のブリュッセル留学に費やされた。つまりブランウェルはそうした家庭内のやりくりの犠牲となり、教育に十分にお金をかけてもらうことができなかったとローは述べている (53)。ローは前述したように、パトリックのブランウェルの将来に対しての関心が不十分であったと非難しているのである。

ギaskellがブランウェルの散文を賞賛した一方で、ブランウェルのホラティウス著『歌章』(Odes) の翻訳を編纂したジョン・ドリンクウォーター (John Drinkwater) はブランウェルの訳文のすばらしさを絶賛している。これらの翻訳の多くはブランウェルがボスルスウェイト家で家庭教師をしていた時代のもので、残りはハワースに戻ってから作られた。ドリンクウォーターはブランウェルの翻訳を次のように賞賛している。

They are excellent in themselves and as good as any English versions that I know, including Conington's. In a few instances, I should say that they are decidedly the best of all....At his best he has melody and phrase. (Law 55)

この後、ブランウェルは鉄道員となるが、職責を十分果たせず、解雇されてハワースに舞い戻ることになる。しかしハワースに戻ってからも、彼はあいかかわらず詩を書くことに時間を費やしていた。このとき、シャーロットとエミリはブリュッセルに行っており、アン (Anne Brontë, 1820-49) はロビンソン家で家庭教師をしていた。ブランウェルは姉妹が不在の間、兄のように慕っていたウェイトマン (William Weightman, 1814-42) を早々と見送り、また伯母の死の床にも付き添った。そのことは友人のグランディに宛てた手紙に示されている (Law 62-63)。ところが、多くのブロンテ伝記作家はこのような事実を無視し、特にメイ・シンクレアは、ブランウェルは当時飲酒に耽っていたと述べて、ブランウェルの孤独と苦悩を一顧だにしないのである (Sinclair 25)。

さらに伝記作家がブランウェルのイメージを決定的に損なうように描いたのはロビンソン夫人との不道德な関係であった。若きブランウェルが上品さや知性をもったロビンソン夫人に惹かれるのはたやすいことだったとローは見なしている (66-67)。最初はロビンソン夫人への気持ちは女王に仕える吟遊詩人のようなものだったかもしれないが、やがてその敬意の念は恋愛に変わっていたのではないかとローは見ている (67)。

やがてロビンソン氏に二人の関係が知られるところとなり、ブランウェルは解雇されハワースに戻るが、傷心の気持ちを癒すためにジョン・ブラウンとウェールズに出かけ、ブランウェルはやがて立ち直りを見せている。ローはこのときこそブランウェルは散文も詩もすばらしい作品を残していると述べている (73)。ところがロビンソン氏が亡くなり、ロビンソン夫人とようやく結婚できると思った矢先、ロビンソン夫人からブランウェルとは結婚できないという手紙を受け取り、ブランウェルの希望は儚くも絶望に変わったのである。

そのころまでにはシャーロットはブランウェルをすっかり見捨てていた。ローによれば、ブランウェルがあらゆる失敗を重ね、ロビンソン夫人との不倫がブロンテ家で家族に知られるようになってから、シャーロットの手紙にはブランウェルへの愛情も憐れみの言葉もまったく見られない (76)。それどころかシャーロットにとって弟を救うより家の名誉と自分の野望が大事であり、彼女のなかには白か黒しか判断基準がないのだとローは批判している (77)。ローは当時精神分析を研究していたブラウン博士の話を持ち出し、ブランウェルの症状はブラウン博士の言う精神病に類似しており、彼にとって必要だったのは精神をケアしてくれる病院に入院することであったと主張する。ところが家ではブランウェルが精神的な病だという認識はなく、彼を労わるどころか、冷たい目でブランウェルを蔑んでいたのである (Law 82-83)。

またブランウェルに対するエミリ、アン、シャーロットの態度もローは比較している。アンは日誌のなかで、ブランウェルに良くなってほしい、将来いいことをしてほしいと希望を表しているし、エミリもまたブランウェルが今後良くなってくれるだろうと彼の将来を見守ろうとする姿勢がうかがえる。特にエミリはブランウェルに理解があり、母親のようなやさしい気持ちで彼を全面的に受け入れていた (Law 84)。父親のパトリックの白内障手術のため、シャーロットはマンチェスターに行き、ブランウェル、エミリ、アンはその手術の成功を祈っていた。ローの推測によれば、このころグランディがハワースを訪問し、ブランウェルはリーズ鉄道へ復職する相談をグランディにしていたようだが、結局うまくはいかなかった (85)。ブランウェルは職探しをしながらも、一方では詩を書きためていて、詩人への道もあきらめていなかったようである。

ブランウェルは、ブロンテ姉妹が詩を書いていたことを知っていたに違いないとローは指摘している。これはわたしもローの意見と同じ主張をもっている。シャーロットはブランウェルが三姉妹で密かに詩を書いていることは知らなかったと述べているために、そのように信じられてきているが、シャーロットは出版社から返事が来ないため不安になり、それをブランウェルに相談していたことは事実である (Gaskell 2 : 316)。おそらくシャーロットの記憶違いによるものであったのであろう。あるいはシャーロットが話を誇張し、ドラマチックにするために、そのような証言をした

のかもしれない。

ローはほとんどの伝記のなかで言及されているブランウェルの飲酒癖について否定はしないが、彼の少し前の世代では、飲酒は紳士のたしなみとされていたことを指摘している (87)。エリザベス朝時代にはお酒は流行していたし、アディソン (Joseph Addison, 1617-1719)、スティール (Richard Steel, 1672-1729)、ゴールドスミス (Oliver Goldsmith)、シェリダン (Richard Sheridan, 1751-1816)、バーンズ (Robert Burns, 1759-96)、バイロン (George Gordon Byron, 1788-1826) はみな大酒飲みであった (87)。ブランウェルが大酒飲みであったという説にはレイランドやその他の人々がそうではなかったと証言していることから、ローはブランウェルが楽しくお酒は飲んでしたが、大酒飲みではなかったと弁護している (88)。さらに弁護を重ねれば、ブランウェルはチャンスに恵まれていなかったばかりか、父親の資力が不足していたために、十分な教育が受けられなかった。前述したように、唯一の資金源だった伯母のお金もシャーロットとエミリの留学に使われた。シンクレアはブランウェルのためにシャーロットが犠牲となって家庭教師に行き悲慘な目に遭ったと言っているが、犠牲になったのはむしろブランウェルのほうであった (Law 89)。

エミリが日誌 (1841年7月) で「すべて借金は支払われるだろう」と書いているが、その借金はブランウェルの借金だとシンクレアが主張している点にもローは反論している。シンクレアは姉妹がブランウェルの犠牲になったということを強調しているけれども、姉妹が家庭教師に行っている間に、ブランウェルも家庭教師や鉄道員として働いており、彼が何も稼いでいなかったわけではない。ましてや問題となっているエミリの日誌 (1841年7月) が書かれたときには、ブランウェルは鉄道員として働いていたのだから、借金がブランウェルのものではなかったとローは主張する (89-91)。

その後、ブランウェルは精神的にも肉体的にも次第に衰弱していくが、1847年まで詩は書き続けていた。さまざまな友人たちが述べているように、ブランウェルは、詩的才能と語りに優れ (Law 100)、詩人への道を必死に模索していたのである。

4、『嵐が丘』はエミリが書いたのか、ブランウェルが書いたのか。

シャーロットが『嵐が丘』 (*Wuthering Heights*, 1847) の1850年版に序文を書いたとき、彼女は『嵐が丘』をエミリが書いたことをまったく疑っていなかった。しかしながら、エミリもシャーロットも亡くなってしまうと、グランディやレイランドは『嵐が丘』がエミリの作品ではなく、ブランウェルの作品だと主張しはじめた (Law 80)。

ローは『嵐が丘』がブランウェルの作品だとする証拠を幾つか挙げている。まずエミリが『嵐が丘』を出版するとき、なぜペンネームにこだわったのか。またシャーロットとアンが自分たちの正体を明かしに行ったとき、エミリが行かなかったのはなぜか。その理由はすべて、『嵐が丘』はブランウェルが書いたからだというのである。エミリはペンネームを用いることによって、作者が誰

であるかを明らかにしようとはせず、したがって自分が書いたのではないから、ロンドンにも行かなかったのだとローは主張している（115）。奇妙なことにショーターはロンドンに行ったのはシャーロットとアンではなく、シャーロットとエミリだったとしている（Shorter 6）。これは明らかにショーター自身の意図的な隠ぺいである（Law 112-13）。

この頃エミリは「ゴンドル」（‘Gondal’）に夢中だったし、彼女の日記には楽観的な態度が見られる。しかし『嵐が丘』の世界は決して明るいものではなく、むしろその逆である。その点からもエミリが『嵐が丘』を書いたのではないと強調している（Law 121）。さらにエミリの関心はシャーロットやアンとは違い現実社会ではなく、その外にある世界にある（Law 123-24）。実際シャーロットも1850年の序文のなかで、エミリの詩と『嵐が丘』に大きなギャップがあり、なぜ『嵐が丘』のような作品を描いたのか理解できないと述べている（110-11）。すなわちシャーロットは序文でエミリが書いたという証拠を何も示していない。したがってこのような観点から見て『嵐が丘』はエミリによって書かれたという証拠は何もないとローは主張するのである（140）。

ブランウェルが『嵐が丘』を書いたという説を一笑に伏してしまう批評家たちは、ブランウェルはそのころ酒浸りで書けるはずがなかったと見なしている。しかしソープ・グリーンを辞めて二か月も経たないころ、ブランウェルは小説を書く準備を進めていた。その証拠として、レイランドに宛てた手紙のなかで、ブランウェルは三巻本の執筆に時間を費やしていたと書いている（Leyland 2： 83-84）。この手紙から、いくつかのポイントをローは指摘している。まずブランウェルが酒浸りで放蕩暮らしをしていたわけではなく、作品の執筆に没頭していた。そのことは、ブランウェルに『嵐が丘』を書くだけの精神が残されていたということを意味する。ブランウェルの手紙によれば、小説には過去六年の自分の経験を描いているという。つまり情熱を燃やした人間の悲劇という点ではブランウェルの実人生と『嵐が丘』の物語は共通している。

さらにローは内的証拠についても考察している。『嵐が丘』は紛れもなく男性が書いたものであり、女性の筆によるものではない。キャサリン二世の養育の部分についてはエミリが書いたかもしれないが、最初から最後まで、全体の物語の概念は男性のものであり（Law 156-57）、細部において、例えばキャサリンとヒースクリフが見たスラッシュクロス・グレンジの居間はブランウェルが見慣れたまさにソープ・グリーンであり、スラッシュクロス・グレンジのイニシャル ‘Th G’ はソープ・グリーンのイニシャルとも奇妙に一致している（Law 158）というのである。

屋敷についてさらに細かく見ていくと“penetralium”（奥の院）という言葉が使用されているが、これはラテン語であり、エミリがラテン語に通じていたとは思われない（Law 158）。一方ブランウェルがギリシャ語、ラテン語によく通じていたことはホラティウスを翻訳したことからも明白である。

ヒースクリフの粗野な言葉遣いは大人しいエミリが用いたものとは思われないし、その言葉は登場人物の口から自然に出ている（Law 159-60）。またロックウッドの海岸での女性に対する態度はブランウェルの経験から来ているものであり、登場するヨーマン階級の男性はブランウェルがよく知っている種の人々であった（161）。ジョウゼフに至っては、ブランウェルが嫌っていた偽善的な

メソディストの狂信者であった (164)。またレイランドが述べているように、ブランウェルの手紙にはヒースクリフの台詞と酷似しているものが見られるとしてレイランドの引用 (Leyland 2: 193-94) を証拠として挙げている (Law 175)。

しかしなぜブランウェルは『嵐が丘』を自分のものだと言明しなかったのかという疑問は残るとローは言う (178)。おそらくこの作品はブランウェルがエミリと共作したのだとローは推論する (178)。ブランウェルはその地方でよく知られたロビンソン夫人との関係が明るみに出てしまうことを恐れ、『嵐が丘』の作者だと名乗ることができなかったのかもしれない (Law 178)。あるいはシャーロットはエミリとブランウェルの共作だという知りながらも、その事実を完全に無視し、エミリの作品だと言い切っていたとも考えられる (Law 178-79)。あるいは出版後の批評があまりにもひどかったため、わざわざ作者の正体をはっきりさせることもなかったのかもしれない (Law 179-80)。このようにローはさまざまな可能性を挙げて、ブランウェル自身が『嵐が丘』の作者だと言わなかったことの理由づけをしているのである。

5、おわりに

グランディ、レイランドに代表されるように、ブランウェルの弁護者たちはブランウェルの悪いイメージを払拭し、彼がいかに才能豊かであり、『嵐が丘』でさえ書くことができたと言明している。ローもレイランドの説を踏襲しながら、『嵐が丘』はエミリとの共作だと結論づけている。グランディやレイランドはブランウェルと実際に交流があったので、彼らの証言がすべて真実ではないにしても、そこには幾つかの新たなブランウェルの姿を発見することができる。しかしローはブランウェルに会ったことはなく、ブランウェルに関する新たな証拠が出てきたわけでもない。そのうえブランウェルの擁護論の高まりが収まったこのときになって、なぜローは再びブランウェルの擁護論を展開したのであろうか。ローの主張に特に目新しいものはなく、驚くべき発見が示されているわけではない。そこにはブランウェルを批判した伝記作家たちへの攻撃とシャーロットのブランウェルへの冷たい態度に対する非難があるのみである。おそらく収束していた議論を、メイ・シンクレアが再び言及し、ブロンテ姉妹はブランウェルの犠牲になったのだと述べたことがローの逆鱗にふれたのではないであろうか。それゆえローは新たな証拠がないにもかかわらず、レイランドの説を繰り返すことによって、ブランウェルの汚名を雪ぎたかったのではないかとと思われる。

しかしローの最大の問題点は、ブランウェル擁護という結論にのみ固執したため、過去の資料を十分に吟味し調査していなかったことであろう。擁護論者に往々にしてあることであるが、彼らは都合の悪い事実を伏せたり、あるいは曲解して、簡単に結論に結びつけてしまう。最初にブロンテの伝記を書いたギaskellでさえもそうだったが、それでもギaskellが今日まで読まれているのは、事実を捻じ曲げている部分があっても、詳細な調査のうえに書かれているからである。伝記は事実とフィクションの間で揺れ動くものであるが、完全なるフィクションでない限り、客観的な証拠の提示と論理的な説の展開が求められるのである。

引用文献

Gaskell, Elizabeth C. *The Life of Charlotte Bronte* 2 vols. Penguin Books,1975.

Law, Alice. *Patrick Branwell Bronte*. London : A. M. Philpot Ltd.,1923.

Leyland, Frances. *A Bronte Family with Reference to Patrick Branwell Bronte*. 2 vols. London : Hurst and Blackett Publishers, 1886.

Robinson, Mary. *Emily Bronte*. London : W. H. Allen and Co.,1883.

Shorter, Clement K. *The Brontes and their Circle*. London : J. M. Dent and Sons Ltd.,1914.

Sinclair, May. *The Three Brontes*. London:Hutchinson and Co.,1914.